

世界の燐鉍石の現状と

今後の見通しについて

三菱商事株式会社化学肥料部

稲 井 俊 一

昨年後半から始まった燐鉍石山元の価格値上げ競争は、まだ現在も続いており、世界の燐鉍石マーケットは大変な混乱状態におちいっています。

燐鉍石不足のため世界のあらゆる場所で肥料工場の運転がとまるといったような、数年前には考えられなかった現象が続発しています。

このような事態はどうして起ったのでしょうか、またいつまで続くのでしょうか。現在、燐鉍石に関係した仕事をしている人なら、全部が持っている質問に対して明確に答えられる人は、残念ながらいないと言ってよいでしょう。

何故なら燐鉍石は、石油や鉍石類と同様に重要な資源であること、また肥料の重要な原料であるため、食料問題にも深い関係のあること等の理由により、その需給バランスは極めて複雑な要因で左右されるからです。

そこで、本年度米国肥料協会の定時総会で、「フロリダ燐鉍石輸出協会」の会長であるターベビル氏が行った「燐鉍石および燐酸肥料の問題点」と題する講演の概要をご紹介します。

同氏の講演をご紹介します理由は、まず同氏がモロッコと並んで、世界の燐鉍石の二大ソースの一つであるフロリダ燐鉍石の代表者であること、また講演の内容から、山元がどのように燐鉍石の現状を考えているかが非常によくわかるからです。

〔ターベビル氏の講演概要〕

『この会議も、発足してから4年しか経過しておらぬにもかかわらず、このように世界中から賓客がお集りになるような会議に発展致しました。会議の推進者の1人として誇りとする次第です。さして振り返って見れば、肥料産業が過去200年間世界の食料問題に対して果たした貢献は、誠に偉大であります。しかし最近に至り肥料、特に燐酸肥料に関して非常に深刻な問題が出てきました。この問題は、世界各国の主な新聞でも大きく取りあげられています。どうしてこんなことになった

のでしょうか。残念ながら私にも明確にはお答えできません。しかしいま現在起っている問題を、私なりに分析してご報告申し上げたいと思います。

本年、つまり1974年は、燐酸肥料が世界的に不足しています。またその原料である燐鉍石の不足は、いまだかつてないほど深刻です。しかも少くとも、ここ数年は続きそうです。しかし燐酸肥料と燐鉍石の見通しを個々に考えれば、この二つは同じではありません。

大ざっぱに見れば発展途上国における燐酸肥料の不足は、さらに深刻化するでしょう。また、西欧各国の燐酸肥料メーカーに対する燐鉍石の供給も減ると思います。

日本に関しては輸出分は別にしても、国内消費分の燐酸肥料が不足することは無いはずですが、しかし燐鉍石が各工場に於て不足することはあるでしょうし、これが解決するのは、燐酸肥料よりも少くとも2、3年後のことになる筈です。

米国内において燐鉍石が不足するということはありません。しかし米国から燐鉍石を輸入している国は、多かれ少かれ不足するでしょうし、輸入ソースを増やすとか、またはリン酸液とかリン酸肥料という半製品、または製品の形で輸入することを検討する必要に迫られると思います。現在いくつかの燐酸肥料工場が米国内で建設中であり、それらが完成する1975年後半以降は、米国内の燐酸肥料の需要は充分カバーされますし、輸出力も増えると思います。しかし原料の燐鉍石は、これらの工場で米国内で消費される量が増えるため、輸出力は削減されることとなるからです。

現在多くの国が燐鉍石、または燐酸肥料の不足問題に真剣に取り組んでいます。たとえば国連会議等においても、肥料問題は重要議題としてキッシンジャーが取り上げています。

国別に概要を申し上げますと、カナダはそれほど深刻な不足状態であるとは言えません、しかし

充分供給されているとは言えません。

メキシコでは完全に不足しており、40%を米国から輸入に依存せねばならない状態です。フロリダは西欧諸国に伝統的に毎年400万トン以上の燐鉱石を輸出していますが、来年、つまり1975年には半分の200万トン以下しか輸出できぬでしょう。

ルーマニアもフロリダ燐鉱石の輸入を強く望んでいますが、残念ながら供給できない状態です。

バングラディッシュ、インド、パキスタン等では状況は更に深刻です。詳細にご説明するとキリがありませんが、世界の状況は以上のようなもので、いかに深刻な状況であるかわかり頂けたと思います。

燐酸肥料、特に燐鉱石の状況が何故かとも緊迫化しているのか、再度考えてみる必要があると思います。

まず第一に、燐酸肥料は食糧生産に絶対必要なものであり、あらゆる人々に影響を与えるということですが、

第二に理由としてあげられることは、燐鉱石の輸出がアルジェリア、モロッコ、セネガル、トーゴ、チュニジア等の国にとっては、国家経済を左右する重要な問題であること、しかしながら一方、買手側の国にとっても、燐鉱石がどのような価格で、どのように供給されるかは、非常に重要な問題であることです。

三番目の理由ですが、正直なところ、これが最も私には理解できないのですが、長いあいだ燐鉱石の供給が非常に豊富で安かったため、これが当たり前と考えられ、現在の不足状態が故意につくられたものだ—と信じている人さえもいるということです。また、このような不足状態になると、各種のエゴイズムも出てきます。たとえば他の国が、燐鉱石が無くて本当に困っているのに、全く気にせず自分のところに1トンでも多くまわせと要求してくるようなことです。これらのひとつひとつが、事態をますます深刻化させる要因になります。要は各人が状況を正確に把握し、冷静に対処することが肝心であると思います。

燐鉱石、燐酸肥料にかかわらず、また、国の内外を問わず、肥料の価格は結局は世界の需給バランスによって左右されます。

たとえば米国が現在まで、世界市場の価格より

安い価格で燐酸肥料が統制されていたことが、現在の米国における供給不足の原因となっています。

この価格統制は米国内で約5年間続いた訳ですが、その間に米国の燐酸肥料の大部分が、海外のはるかに価格の高い市場に向かって流れていったことは、誠に当然であったと思います。

海外市場における高価格がなければ、現在進行中の燐酸肥料プラント建設等は無かつたでしょうし、この意味において米国の農家は、海外市場の高価格に感謝せねばなりません。

最近に至りこの統制は撤廃されましたが、世界的に見れば、食糧増産の必要性はますます大きく、従って燐酸肥料の価格上昇の要素は今後とも存続しますし、この状態が続く限り、米国内の価格が国際価格に近づくまで、米国内の不足状態は続くと思います。いずれにせよ、どこの国も結局は、国際市場の影響を受けるのです。

世界が永久に燐酸肥料の不足に直面するという意見に、私は賛成できません。米国の燐酸肥料メーカーは、現在の生産能力を40%あげるために工場建設に踏み切っており、これらの工場の全部が1976/77年までに完全操業される予定です。この事実を考えれば、現在の燐酸肥料不足を充分カバーする生産設備が建設中であることは、皆さんにおわかり頂けると思います。私の考えでは、1975年の春まではきびしい状態が続きますが、それ以降はだんだんよくなってくると思います。

しかし燐鉱石不足の問題は、燐酸肥料の問題より、はるかに大きな問題です。1960年代を通じてフロリダ、ノースカロライナの山元の在庫は3倍にも増え、1969/70肥料年度末には1300万トン以上にも達しました。

このため価格は下がり生産も減少し、また生産設備に対して十分なメンテナンスも行われず、一部では回復不能の処までいきました。今年でさえ、需要の大きな増大と高価格にもかかわらず、1967/68肥料年度よりも、わずかに3%しか生産は増えていません。

たしかに今年の販売数量は、昨肥料年度と比較すれば27%も増えていますが、これは在庫数量を減らすことにより達成できたもので、生産が増えている訳ではありません。現在のフロリダには1ヵ月生産分の在庫も無いのではないかと思います

先述のように、米国内における燐酸工場が完成すれば、多量の燐鉱石が原料として使用され、燐鉱石自体のフロリダからの輸出は今後増々苦しくなると思います。

もちろん言うまでもなく米国の燐鉱石山元は、生産を1日も早く増やすべく懸命の努力を払っています。しかし残念ながら今すぐの解決になりません。今から数年の間はフロリダ燐鉱石の輸出量は、減らざるを得ないでしょう。1977年になれば状況は段々良くなり始めると思います。米国内の需要もその頃には大体頭打ちとなり、燐鉱石の生産拡張も軌道に乗っていると思われるからです。

以上のように我々は、米国からの燐鉱石の輸出見通しには悲観的ではありますが、燐酸肥料全体の輸出量は今後とも増え続けると確信しております

輸出できる燐鉱石はまちがいなく減っていきませんが、その分は燐酸肥料製品としての輸出が増えていき、燐酸分としてはカバーできるはずで

す。米国外の燐鉱石生産設備拡張計画についても、種々報告されていますが、これらを総合して見ると、米国の今後の5カ年にわたる計画と大体歩調を同じくするようです。

これらの燐鉱石生産の増加を合計すると、4600万トン近くになります。従って全世界の供給量は1億6千万トンとなり、今日の生産量のほぼ5割増ということになります。フロリダ以外ではモロッコの拡張計画が最も大きく、フロリダ以外の増加量の殆ど半分に達する規模です。スパニッシュサハラ、ソ連、両方で850万トン、アルジェリア、ヨルダン、チュニジア各国も、100万トンクラスの拡張をします。

さらにオーストラリアにおいても大規模な鉱区が開発途中であり、1977年から生産が開始されると言われており、フル稼働されたあかつきには、年間500万トンが生産されることになり

ます。まあこういう訳で援軍はもう間近と言えると思います。しかし、そういう間にも事態はますます緊迫化しています。肥料工場の中には原料の燐鉱石不足のため、フル稼働できぬところが沢山出てくるでしょう。

西欧各国のように、昔から燐鉱石を輸入し燐酸肥料を輸出していた国々は、輸出市場の大半を失うことになりま

す。ブラジル、カナダ、メキシコのように農業生産の大きな増加を計画し、目標としていた国々は、計画を練りなおす必要があるかも知れません。未開発国における飢餓等の悲惨な事態を避けるために、政府と民間企業は手をたずさえて協力しなければなりません。

しかしながら欠乏の時期は短期間のはずです。各企業の努力で切り抜けられるはずで

す。現に我々は今までも、苦しい時期を何度も切り抜けてきたではありませんか。

輸入業者の対燐鉱石感について

最後はこの重大な時期を切り抜けるために、皆さんの大局的な見方と、利己主義を克服した公正なる行動を希望致したいと思います。』

大変長くなりましたが、以上がターベビル氏が行った講演の要約です。現在の燐鉱石および燐酸肥料の世界における状況がよく述べられており、如何に燐酸肥料、特に燐鉱石が不足しているかがおわかり頂けたと思います。

しかし日本においては、実感としてそれほど燐鉱石が不足しているとは思えないと思います。昨年末から今年初めにかけて、かなりひっ迫致しましたが、それでも燐鉱石が不足したために操業が止まった工場等はひとつもなかったはずで

す。この意味において日本は今のところ、非常に恵まれていると思います。この理由として、日本の場合は、各輸入業者が燐鉱石を重要な資源であると考え、その輸入にあたっては海外山元との長期的な友好関係を重視し、供給過剰の時も足もとを見てむやみに買ったたくようなことをせずに、ねばり強くやってきた結果であると思います。また新しく開発された山元に対しては、積極的に取り組み、新規輸入ソースを増やしていったことも、今となっては非常な助けとなっております。

いずれにせよ、燐鉱石は日本には全く資源がなく全量輸入にたよらざるを得ません。しかも肥料原料としてはもちろん、驚くほど多くの皆さんの身の回りの品物に燐は必要な原料です。これからも日本が必要としている他の多くの資源と同様に、その安定確保の問題については、慎重に、業界が協力して、対処していかねばならぬ問題であると思います。